

論文の内容の要旨

論文題目「東南アジア地域における民族観光の可能性

－同一型民族観光から考えるホストとゲストのあり方－

学位申請者 岡山 奈央

キーワード：東南アジア、民族観光、観光のまなざし、
ホスト・ゲスト関係、ブルネイ・ダルサラーム

欧米諸国から始まった国際観光の増大は、アジアにも急速にその市場を広げ、ゲストとなる観光客の国籍や志向も多様化してきた。2019年の東南アジア地域全体への国際観光客数は、1億3480万人に到達すると予測されており、観光産業は今後もより一層成長することが見込まれている。近年では、これまで観光産業に取り組んでこなかった国や地域も、観光市場に参入し始めており、観光地間の市場競争もますます激化することが予測される。一方で、観光は社会に対して経済成長などの恩恵のみならず、環境問題や文化変容などの負の影響をもたらしてきた。民族観光においては、ゲストとなる観光客が、原始的でエキゾチックな体験ができることを過剰に期待することにより、ホストの人々は、異文化との接触や観光に対して疲弊し、嫌悪感を抱くことが明らかになっている。このような問題に対しては、観光人類学を中心に様々な分野で議論が重ねられてきたが、根本的な解決策は講じられず、現在においても、観光産業の進展の陰で苦しむホストの人々がいる。

筆者は、2015年から東南アジアの民族観光に関する調査を行い、ホストとゲストの間で生じる文化的な問題や、観光がホスト社会にもたらす影響の実態について分析してきた。第1章では本研究の目的と調査方法について述べ、本稿の構成についてまとめた。調査地は、先行研究に基づき、東南アジアの民族観光を論じる上で、特に重要だと考えられる地域を選出し、必要に応じて地元住民や観光関係者に対してインタビュー調査を行った。第2章では、観光産業の現状を捉えることを目的に、世界における観光発展の歴史と、急成長を遂げている東南アジアにおける観光産業の動向について述べた。また、広く観光理論と東南アジアの観光研究の著作を渉猟し、黎明期、確立期、発展期に分け、研究史としてまとめた。この過程で明らかになったのは、東南アジアにおける民族観光研究の歴史はまだ浅く、観光による種々の問題や影響を明らかにするために、具体的な現象を捉えようと、個別的な事例研究が積み重ねられてきたにすぎないことであった。そのため、本稿では、民族観光に関して、東南アジア全域を包括的に捉えて分析し、学際的で総合的な研究を行

うことを試みた。

第3章では、民族観光の定義を行い、東南アジアにおける民族観光の特徴を論じることで、民族観光を行うことによる政治・経済的影響と社会・文化的影響を包括的に捉え、その影響の重大性について明らかにした。近年、主に観光人類学の分野で論じられてきた、社会・文化的な問題は深刻化し、ホスト社会の中には、生活を変えざるを得ない状況に追い込まれている人々がいる。民族観光を通じて、村民以外の人を村や自宅に迎え入れることは、ゲストである観光客のまなざしを少なからず受けることとなり、他者からまなざされているという意識は、ホストの人々の生活に、良くも悪くも変化を与える。そのため、第4章では、先行研究をもとに、東南アジアの民族観光を俯瞰的に捉えて分析するため、ホストの主体性やホストとゲストの関係に着目した分類を行った。分類にあたっては、東南アジアの民族観光を、観光客のために、伝統文化や生活に演出を加えて見せる脚色型と、ありのままの民族の姿を見せる同一型を線分の両極とし、その中央を、観光客用の文化と自文化の核になる部分を分ける分離型とする連続的な分類モデルの中で捉え直した。

脚色型民族観光が典型的に行われてきたサラワクやタイなどの山岳地域では、政府などのブローカーが経済的な利益を重視するあまり、観光客の歪曲したまなざしを助長し、ホストの人々が主体性を持てぬまま、一方的に「見られる」民族観光が行われてきた。パリで行われている分離型民族観光は、シュピースをはじめとする欧米の人々との出会いを通じ、観光客に見せるための観光芸能を創作することによって、地元の人々の生活から観光を分離するという特異な民族観光として成長してきた。一方、同一型民族観光を行うブルネイ・ダルサラームの人々は、ホストの人々の意思に基づき、観光客と親密なコミュニケーションを重ねながら、ありのままの生活を見せることによって、ホストとゲスト双方にとって異文化に関する学びのある交流を行っていた。このような形態は、これまで引き起こされてきた、社会・文化的な問題を軽減できる、新たな民族観光のあり方であると捉えられる。そのため、第5章と第6章では、ブルネイ・ダルサラームで同一型民族観光が行われるようになった歴史的背景や、国の政策を論じ、どのようにしてホストの人々が主体的に自文化や観光に対して考え、取り組むようになったのかを考察した。その上で、第7章では、同一型民族観光の意義と問題点を明らかにし、その分析を基に、脚色型、分離型を含めて民族観光全体を視野に入れた今後の展開を予測した。

著しく変化する現代の世界情勢下においては、1つの成功例を他の地域にそのまま当てはめて観光推進を行うことや、観光を一概に規制することを行うのではなく、その時代の状況を的確によみ、ホストの人々がどのように観光と関わっていくべきかを、ホストの人々自身が主体的に考えていく必要がある。ホスト側の利益を優先することや、伝統的な文化やライフ・スタイルを守ることは必要ではあるが、民族観光のあり方は、地域の事情に基づいて考えられなければならない、多様性が尊重されるべきである。それゆえ、東南アジアの民族観光は、本論で述べた3つの主要な形態の中間に位置付けられる民族観光も存在し、時と共に形態が変化する場合も見られ、民族観光の諸形態は動的なものとして捉

えることが重要であろう。

これまで東南アジアにおいて、観光の実践は専ら経済開発の手段として捉えられてきたため、より多くの観光客に来てもらい、国や地域の収入を増やすことが最大の成果であると見なされてきた。しかし、それぞれの民族によって、また個人によって「豊かさ」の尺度は異なるものであり、統計上数字として表される収入の増加のみで観光の成否を測ることはできない。民族観光は、ホストとゲストが親密な交流を行い、互いに文化的な教養を高めることができるという側面ももっており、このことも同様に価値のある成果として評価されるべきものである。すなわち、ホストが主体的に民族観光に対する考えを持ち、自らの伝統文化や生活を守ることと、自文化を経済的に利用することとの折り合いをつけながら取り組むことが、何にもまして重要なのである。適切な形で民族観光が推進されるならば、民族観光は経済的な恩恵のみならず、他民族・他文化・他宗教を尊重し、様々な民族や文化が対等なものであるという意識をもつことができる心性を養う機会を提供し得るものである。それはまた、民族やコミュニティの真の自立を達成する礎となると言えよう。観光客の志向が多様化する現代において、ホストの人々の主体性が重んじられ、多様な価値観に基づいた民族観光が展開されるようになれば、東南アジアの観光は、より一層様々な国から、多様な志向をもった観光客を惹きつけるようになることが期待できるだろう。